

もうひとつのコミュニケーション研究

—ことばを解釈・評価する心的過程に着目して—

宇佐美洋 (日本語教育研究・情報センター)

smudr@ninjal.ac.jp



1. 「コミュニケーション観」のとらえ直し

- 言語の「理解(decode)」「産出(encode)」の繰り返しがコミュニケーション? →コミュニケーションの一部しか見ていない
- われわれは理解した内容に対し「解釈」「判断」を行い、その先の言語行動につなげている→この過程の解明が必要

2. 「評価プロセス」の普遍性と個別性

- 言語運用を評価する観点やプロセスは、人によって千差万別←評価の際に準拠する価値観が大きく異なる
- **しかし、無限に多様、とは言えないのでは?**
 - 多様に見える評価観点・評価プロセスの中にも、何らかの普遍性が見いだせるのではないか?
 - 評価プロセスの普遍性と個別性を、モデルとして表現できないか?

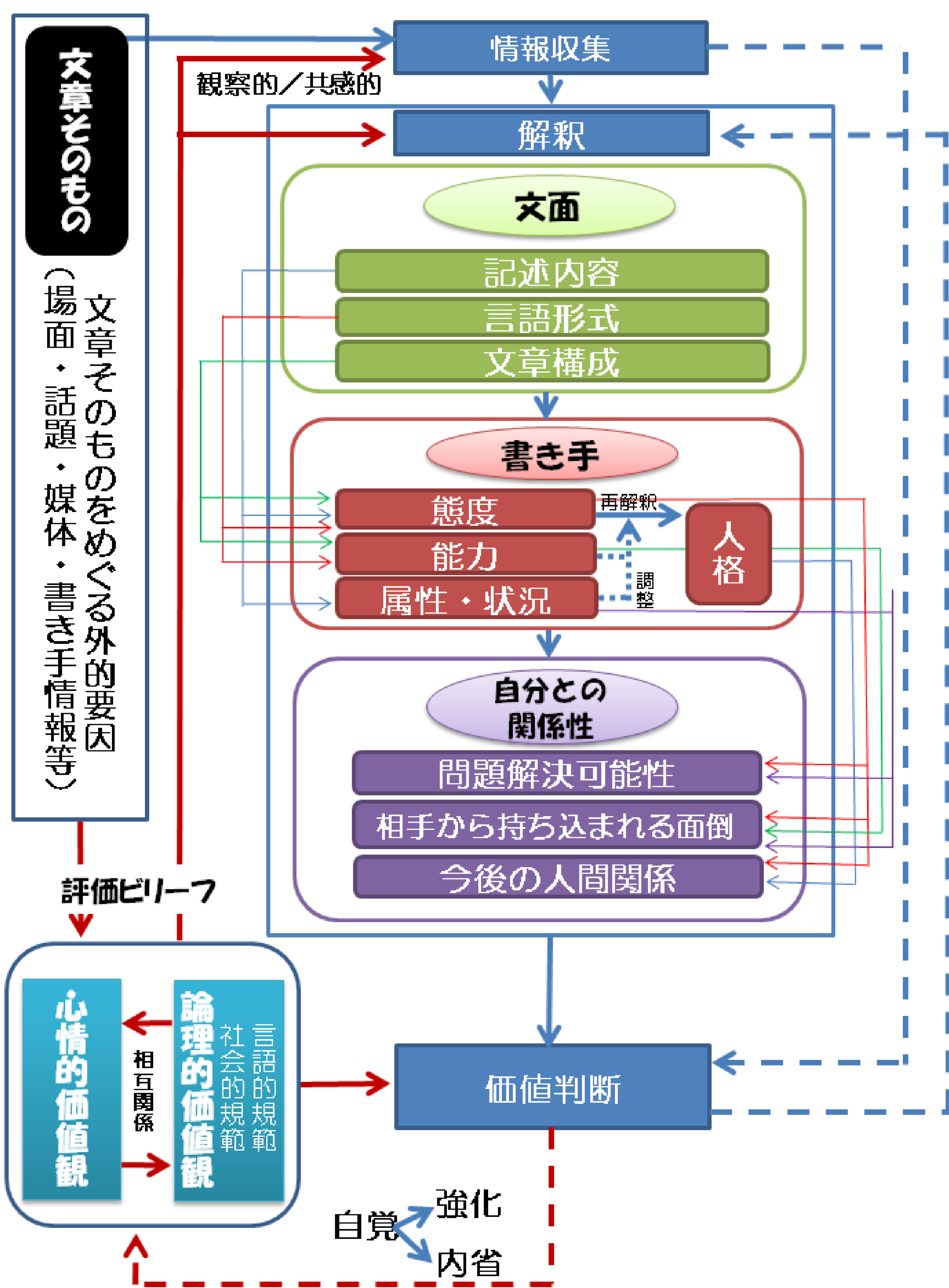
3. モデル作成のための材料

- 日本語学習者が書いた謝罪文10編に対し、母語話者12名が「自分がその謝罪文を受け取ったとして、どの程度『感じがよい』と感じるか」という観点で順位付け
- 順位付けの過程の「プロトコル」、順位付け作業後の「PAC分析インタビュー」を質的に分析

4. 評価プロセスモデル

「評価」の基本行程: 情報収集→解釈→価値判断

「解釈」の対象の変遷: 文面そのもの→書き手→書き手と自分との関係性

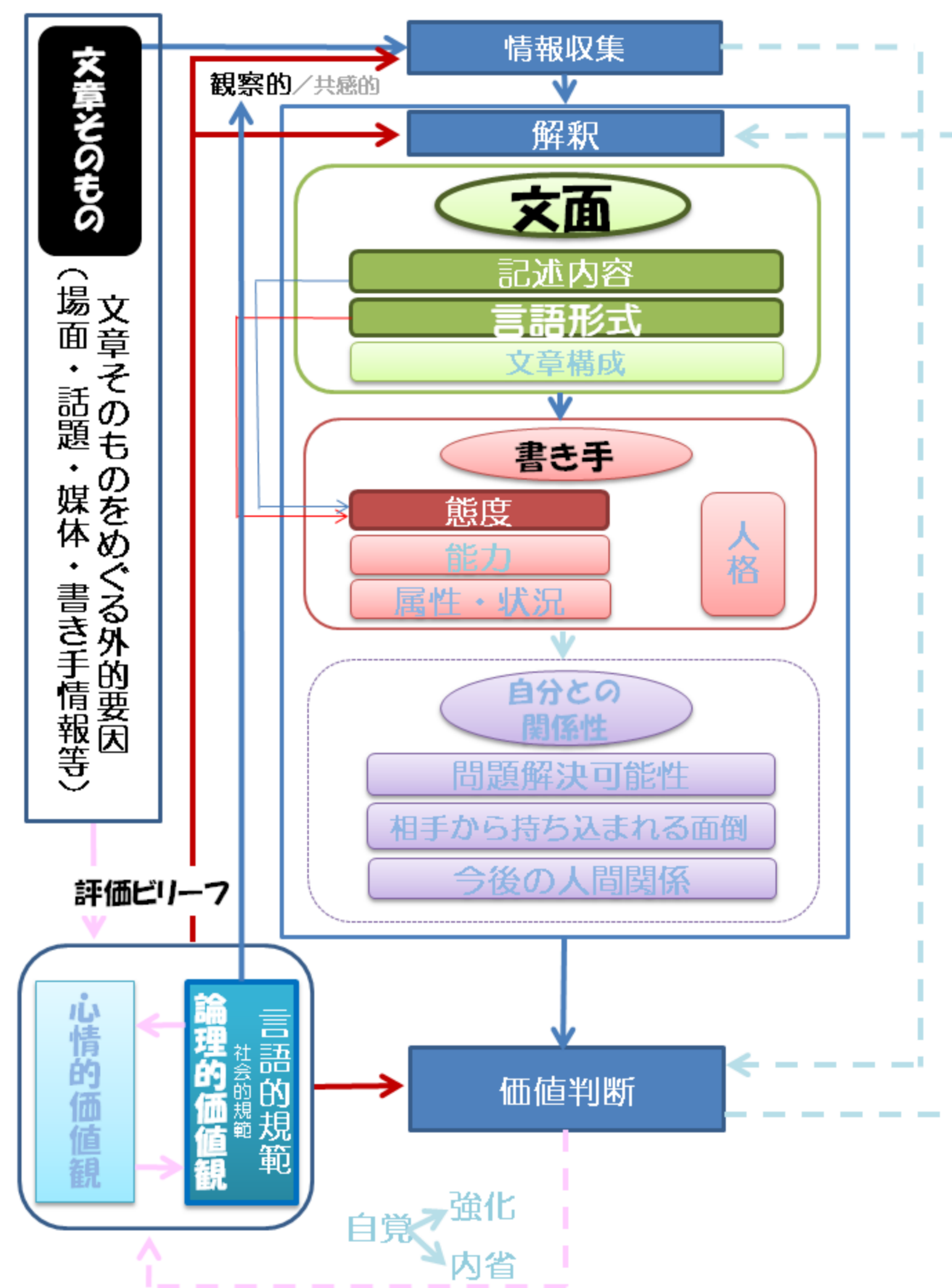


評価ビリーフ: 評価プロセス中、どの行程・観点を重視するか、どのようなやり方で情報収集・解釈を行うかを方向付けるもの

5. 「評価プロセス図」

- 個人の評価プロセスを、「評価プロセスモデル」を調整することによって表現したもの。モデル中のどの行程・観点到焦点が当たっているかにより、評価の「個別性」を表現

6. HSc1氏 評価プロセス図

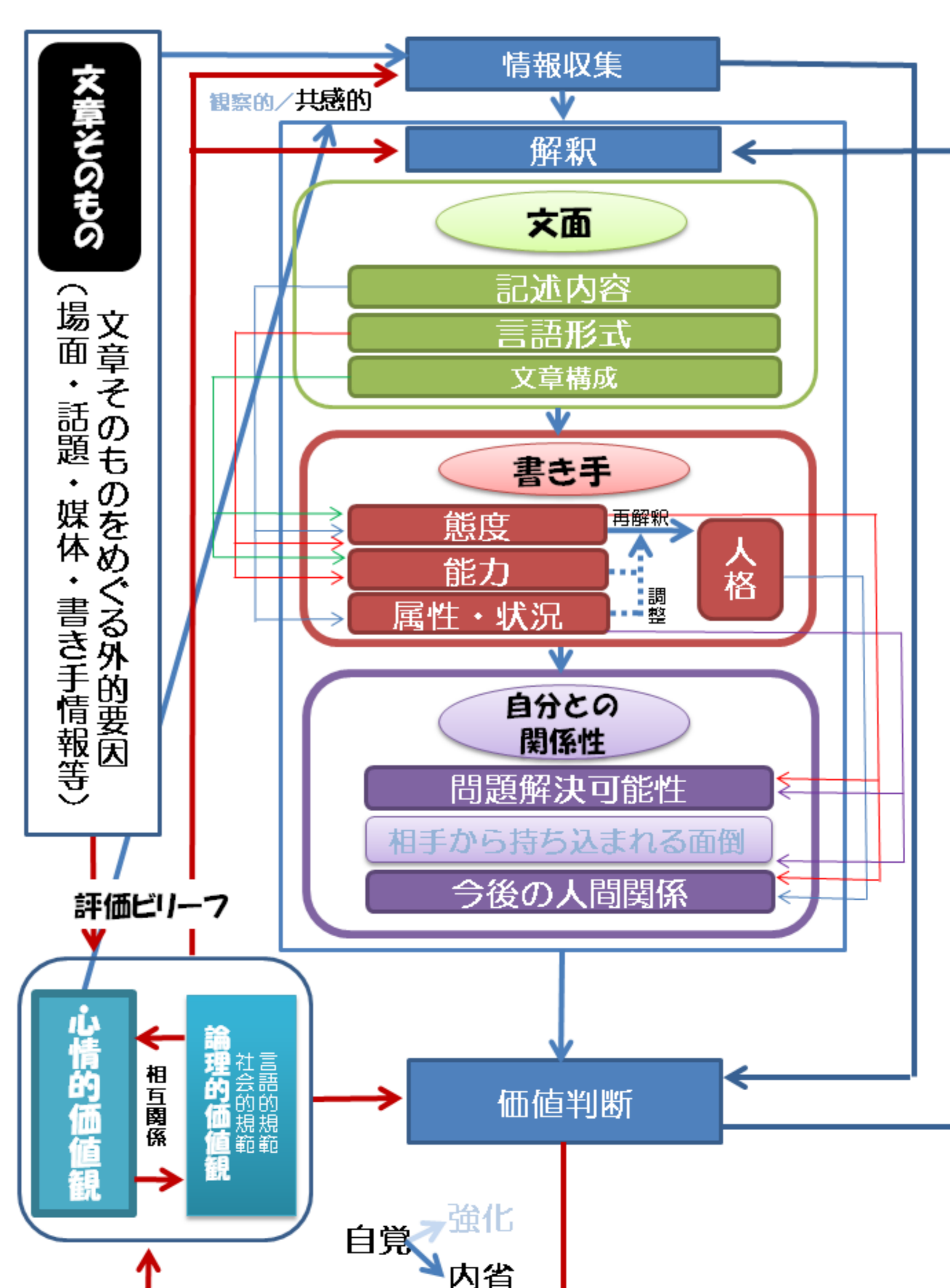


- 評価コメントのほとんどが「文面(特に「言語形式」)に関するもの(77/87)

- 心情を交えない、「中立的価値判断」がほとんど→観察的

- 「書き手」の「態度」に対する言及はあり。一方で、「謝罪の気持ちがあるだけでは不十分で、それが言語によって明確に表現され、相手に伝わって初めて意味を持つ」という意味の言及あり

7. MYt4氏 評価プロセス図



- 多くの観点に対しまんべんなく着目を

- 「文面」にも着目していたが、それはあくまでも「書き手」がどのような人であるかを推測するための手掛かりとしての着目

- 書き手に対し「共感を持てるか」を重視

- いったん「価値判断」が行われてから、「なぜ自分はそのような判断を行ったのか」という「後追的再解釈」も見られた→評価ビリーフの内省